

## 優秀賞



### 私にできる小さなこと

山形県尾花沢市立尾花沢中学校

二年 内山 こころ

「もう髪切りたい。」

今年の夏も暑かったが、去年の夏も負けず劣らず暑かった。中一の夏、私は長く伸びた自分の髪が、もう暑苦しくてたまらなかった。けれど、私には髪を切れない事情があった。

私は、小学校四年生から三味線を習っている。「おばなざわ花笠まつり」の際、囃子屋台に乗り、神様に奉納演奏をするのだ。美容師さんからきれいに髪を結ってもらい、着物を着せてもらって、まつりに来てくれている人たちの前で、私は三味線を弾く。そのために髪を伸ばしている。まつりは毎年八月の下旬。だから、夏の間は長い髪を抱えて暑さと闘うことになる。暑くて暑くて、髪を洗って乾かすことが面倒でたまらなかった。

「まつりが終わったら、絶対に切る。」

そう決めていた。

そんな私を見て母が言った。

「どうせ切るなら切った髪を寄付してみたら？」

その一言が私の心を動かしした。なんとなくそんなことができるらしいとは知っていたが、詳しいことはわからない。言っている母も同じだった。

母が、いつも私と弟の髪を切ってくれている美容

師さんに聞くと、

「ああ、ヘアドネーションだね。前にもお客さんでやった人がいるから、送り先もわかるよ。ただ、寄付した証明書とか、お札の手紙とかは何もなくて、本当にただ寄付するっていうだけだよ。」

美容師さんの答えは明快だった。

ヘアドネーション。病気や事故で髪を失った子どもたちに、無償でウィッグをプレゼントする活動。そのために、切った髪を寄付を募っているのだそうだ。どんな髪でもいいのだが、ウィッグにするためには、三十一センチ以上の長さが条件だという。それがウィッグの一部になる。「一部」というのは、一人分の髪ではウィッグを作ることはできないからだ。一人一人の寄付する長さや量にもよるが、大体二十〜三十人分の髪が必要だとのことだ。

私は、知らない人たちと手をつないでいる姿を想像してみた。みんな協力して、髪を失った子にウィッグをプレゼントする。受け取った子はきっと笑顔になってくれるに違いない。

「私、それやる！」

気がついたら声に出していた。

尾花沢が一年で一番活気に満ちる日、おばなざわ花笠まつりが終わり、三味線の奉納演奏も無事に終えて、ついに髪を切る日がやってきた。今まで何度も髪を切ってきたが、今回はいつもとは気持ちが変わった。ドキドキだけでもワクワクだけでもない、心が引き締まるような気分。そして切り方もいつもと違った。まずは洗った髪をよく乾かして、小さな束を作り、それを丁寧に切ってくれた。

私の髪は量が多いと言われていたけれど、こうして切ったものを実際に手にしてみると、なんだか心細いくらい少なく感じられた。これではやっぱり、みんなと協力しないとウィッグは作れないなと実感

した。

「こころちゃんの髪が、誰かのために役立つんだよ。とっても素敵なことだよね。」

美容師さんの言葉が心に響いた。

家に帰ると、私は髪を自分の好きなブルーの袋に入れた。こんな小さなことでも、誰かを幸せにすることができると。この活動を知る人がもっともつと多くなり、心の輪が広がっていったら、髪を失ってしまっても、その人の悲しみを小さくしてあげられるようになるのではないか？ そんなことを考えながら、ブルーの袋に教えてもらった住所を書いて母に渡した。

次の日、

「送っておいだからね。」

と言われた時、私の髪が入ったあのブルーの袋に羽が生えて飛んでいったような気がした。

「どんなウィッグになるんだろう？ そして、どんな子の元に届くんだろう？」

髪を切る時に感じたあの気分がまたこみ上げてきた。

私が行ったことは、決して特別なことではない。誰にでもできる小さなことだ。そしてそれは、ヘアドネーションに限ったことではない。私たちにとっては小さなことでも、相手にとってはとてもうれしく、温かく感じられることはもつといろいろあるのだと思う。そんな、自分にできる小さなことを、これからも探し、実行していきたい。

どうか私の髪が悲しんでいる子の元へ届き、その子を笑顔に変えられていますように。